

---

# 初恋の君はホモ

ILL

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初恋の君はホモ

### 【Nコード】

N3617X

### 【作者名】

ILL

### 【あらすじ】

「ぼく、男の子が好きなんだ…」

初恋の君に告白して玉砕したティア。恋した相手はホモだった。彼女は彼に見合う男となるために、男として自分を磨いてゆく。そう、漢になって彼に会いに行くのだ！

地上に舞い降りた我等が天使レティ（前書き）

初投稿となります。 よろしくお願いします。

## 地上に舞い降りた我等が天使レティ

「ぼく、男の子が好きなんだ…」

頬を赤らめそう言った天使は、私に絶望にもたらせた。

それは十年くらい前の事。私には昔、好きな男の子がいた。それは私にとって初恋で、彼は八歳私は七歳の頃の話。

村の子達からはなよいとか女みてえとか散々言われていた彼だったが、優しい彼が私は大好きだった。

彼は優しくかったし可愛かった。ふにやってする笑顔もはにかんだ表情も母性本能を擲る可愛さだった。顔も整っていて、金髪碧眼の天使のような愛らしさだった。

村の男の子達から彼は仲間外れにされたりしていたけれど、本当は優しく可愛いに男の子は素直になれず意地悪してしまう事も私は知っている。勿論彼にはそんなこと教えなかったけど。

意地を張る方が悪いのだ。男の子から仲間外れなかわりに村の女の子からとは私を含めて仲良しで、よくオママゴトなんかで遊んだ。

私は彼が本当に好きで、ライバルは沢山いたけど頑張った。幼児には幼児なりの戦いがあるのだ。

例えばオママゴトする時なんかは、彼が父親役をする時誰が妻にな

るかで揉めた。ここで母親役と言わずに妻と言つのが女の戦いである。

彼が兄役の時妹の座を取り合い、はたまた彼が弟役の時年上の女の子達がうるさかった。

そんな奴らは私がぶった切る。

何故か彼は姉役をやりたがっていたけれど。

そんなこんなで、幼児の戦いの日々は続いていった。だけどあの日から、その日常は崩れてしまう。

始まりはある女の子が泣いたこと。彼女の名はメリール。私の一番のライバルである。強気な彼女と彼を取り合いぶつかるのは当たり前的事だ。ぶつかると言っても仲が悪い訳ではないのだが。

「メリール、なんで泣いているの？」

「うっ……ぐす……」

「泣いてるだけじゃわからないよ。」

「うわああーんっ……」

「レティがあ……ふえ……」

「レティ？レティに泣かされたの？」

レティとは彼、我等が天使の名前である。しかし私にはあの優しいレティがメリールを泣かすなど信じられなかった。

「レティがなにをしたの？」

「うっ……レティに、レティに告白したのよ！ふられたの！」

何だそういうことか。私は納得しかけた。

「ふられたから泣いてるの？」

「それも、あるけどっ……ぐす」

「ほかにもあるの？」

「うん…うっ、けど、いえない！うわぁーんっ」

どうやら振られただけではなかったらしく、他にも理由があるとの事。だがメリールはなかなか口を割らない。

「うるさいわね！あっちいてよ！知りたければアンタも告白すればいいじゃない！うわぁーん！」

「なるほど…」

レティがメリールに何を言ったのかすごく気になる。そういう訳で私はレティに告白しにいった。

簡単に言っているように思えるかもしれないが、結構心臓はバクバクだった。

レティに「レティ好き」と言っても、「僕も好きだよ」とにっこり笑顔で言ってくるため、告白は流されている。因みに私はその笑顔にキュン死にした。

だけど今度は本気の告白だ。キツチリハッキリと返事をしてもらう。

「レティ」

「あ、ティア。」

レティが振り返って私を見た。緊張しているが、私は表情筋が硬いほうなのであまり外見にはあらわれない。この時ばかりは自分の表情筋に感謝したものだっただ。

「あのね、聞いてほしいことがあるの。」  
「うん、なあに」

可愛い。首をこてんと傾けて聞いてくる天使は最高に可愛かった。

「あのね、好き。」  
「ぼくもティアのこと好きだよ。」  
「ちがうの。」  
「え？」

案の定レティは勘違いをした。いつもの好きとは違うのだ。

「レティのこいびとになりたいってゆう好きなの」  
「えっ」

レティは目を見開く。そういえばメリールが告白して私も告白したから、レティは本日二回目の告白になる。それは流石に驚いたのだらう。

「だめ……？」

「えっと、その……ティアのことは好きなんだけど……あの、ね……」  
「なに？」  
「あのね、ぼく……」

断るのか、と思った。だけど私はそれでレティを諦めるつもりは全

くなかった。ダメかもなあとは思っていたし、それでも押しつけて徐々に好きになってもらうのだ。そう考えていた私は、レティの放った言葉に固まった。

「ぼく、男の子が好きなんだ…」

硬直。勿論私である。

「おとこ、のこ…?」

「うん…。だから、ごめんね、ティア。」

「おとこ…」

「あ、あの…ティアのことはともだちとして大好きだからねっ…! 嫌いだからじゃないよ?」

レティは男の子が、好き。

やっとメリールが号泣している意味が分かった。涙が出た。

「ティ、ティア…あの、ごめんね。ほんとにごめんね。泣かないで

…」

「レティ…」

「えっと、なあに…?」

無言で涙を流す私にレティはかなり焦っていた。そんなレティに私は問い掛ける。



「レティ、好きな男の子、いるの…？」  
「えっ！」

真っ赤になった天使。確定だった。敵はこの村にいる。

「だれ？」

「うう…いわなきゃだめ…？」

「だめ」

「えっと、ね…ルーカスなんだ…」

ルーカス、だと…？

ルーカスはこの村のがき大將的存在だった。レティに意地悪しているのも奴だ。それなのに何故、私の天使は、あんな奴を、好きなんだ！！

「レティ…なんであいつを好きなの。」

「え…なんでって？」

「あいつ、いつもレティにいじわるする。」

「いじわる…なときもあるけど…ほんとに優しいんだよ？このまえ、犬にかまれたときにね…やっつけて手当してくれたんだ。」

「でも、男の子だよ？」

途端にレティの瞳が潤みだす。しまった！

「やっぱり、へんだよね…ぼくが男の子好きなの…きもちわるいよね…」

「きもちわるくなんかない！ごめんレティ！へんじゃないよ！」

私とした事が、レティを泣かせてしまった。レティは泣いても可愛

かったが、そんな場合ではない。レティを泣かせたくて言った訳じゃないのだ。

「ほんと…?」

「ほんと！ほんとのほんと！」

「ふふ、ありがとう…」

振られた私は、やはりレティにキュン死にした。

その日の内に私とメリールは村中の女の子を集めた。そして告げた。我等が天使、レティがホモであると。

一部を除いて皆歎き悲しんだ。何故か喜ぶ者もいた。理由は今でも分らない。

悲しむ者の中には、ルーカスに天誅を！村八分！抹殺！むしろ村の男の子を排除！という意見もあったが、レティが悲しむので却下。激しく賛同しなかった。ルーカスに突撃していくメリールを止める

のには骨が折れた。

私達はどうにかしてレティの頭からルーカスを消すために、力を尽くした。これも天使を守るため。ルーカスは村中の女の子の敵となる。特にメリールは食ってかかりまくって、私を苦勞させた。

そんな中、急にレティが引越す事になった。一体誰がこんな事を予想しただろうか。

阿鼻叫喚の女の子達。ある者は地面を拳で打ち砕き、ある者は壁を破壊する。またある者は泣きながら村中の草をむしり取り、ある者は叫びながら畑に鍬を叩きつけていく。村が綺麗になり、畑作業は異例の速さが発揮された。

これも全て、レティあつてなされる事なのだ。

私とメリールはレティと話をした。別れる前に、話したい事が沢山ある。

因みに私達の尽力のおかげで、レティのなかでのルーカスの立場は「好きな人」から「ちよつと気になるただの友人」に格下げすること成功していた。非常にいい仕事をした。

「レティ、ほんとにいつちやうの？」

泣きそうな顔でメリールが問う。レティは悲しそうな表情で言った。

「うん、お父様がいかなきゃいけないんだって。おうとつてところに行くんだって。」

「なんで！レティはのこつてよ！」

「ごめんね。お父様もお母様もいくから、ぼくもいかなきゃ

…」

「うう、うわああーんっ！！」

「メリール…あのね、お父様もお母様もおうさまってひとによべれたっていつてたの。すごくえらいひとだから、いかなきゃいけない

んだって。ごめんね。メリール、ティア…」

「ううん、レティのせいじゃないよ。ほらメリール、泣きやんで。」  
「うわああーんっ！」

私だって泣きたい。メリールずるい。

「う、レティ…てがみ、かくね…ふえ…」

あ、やばい。涙が出てきた。

「メリールも、ティアも、泣かないで…ふ、うう…」とずっとレティも泣きはじめて、三人で仲良く号泣した。

そしてレティは王都へと旅立って行った。

愛も己も育んだ十年（前書き）

一  
氣に十年。

## 愛も己も育んだ十年

あれから、十年。私は十七歳となっていた。レティが王都へ引越してから私は一つ決意をした。

それは、レティに見合うような男になることだ。私は女だが、鍛えて鍛えて、男らしくなった私をレティに見てもらうのだ！そしてもう一度告白すると決めた。

そのためには師が必要と感じた私は、元冒険者で隣に住んでいるガナトスさんに弟子入りして猛特訓をした。冒険者時代は結構名を馳せていたらしい。最初は渋られたけどかなりしつこく頼みこんで弟子にもらったのだ。

師匠はかなり厳しくて恐いし強い。ぶっちゃけ今までよく生きてきたな、と思うくらいには過酷な修業だった。

「俺の弟子になるんだ。生半可な覚悟も修業も許さねえ。」と言って修業をつけて貰った。

確かに生半可じゃ到底無理な修業だったが、もう少し加減してもいいんじゃない？などと言ったら半殺しなため口には出さない。

師匠は弟子ならば、女とか男とか関係なかった。それは有り難いのだが、関係なさすぎである。もうちょっと気にして欲しい。おかげでかなりたくましく生きていけるようになった。

そんな修業して家族に反対されないのか、という問題はない。うちは基本放任主義だ。むしろ自分で決めたのなら最後までやり通せや、とのこと。実は兄と妹がいるため、家から私が出ていっても心配はない。

「ティア」

「何、兄さん。」

「本当に村を出るのか…？」

「ああ、もう決めたよ。私は王都に行く。」

「そうか…」

旅仕度をしている私の目の前で憂い顔をさらす中々のイケメンが私の実兄、ディラックである。村の女性からは少しタレ目なところが可愛くてイイ、らしい。しかし中身は残念。兄はシスコンの気があり、妹のリノリアを大層可愛がっている。勿論私もリノリア程ではないが可愛がられていたので村を出るのを心配されていた。唯一修業もちよつと反対気味だった人だ。

「無駄よ、兄さん。姉さんってば頭堅いんだもの。」

「リア…」

妹のリノリアが口をはさんできた。リアもまた可愛らしい容姿だ。深い蒼の髪の毛は半分ポニーテール。目はパツチリとした黒。相変わらず可愛い妹だ。

私も結構シスコンらしい。因みにうちの家族はみんなこの色である。

「姉さん…って言ってもその容姿じゃ説得力ないのよねー。」

「兄さんでいいぞ。」

「それは駄目だから！お兄ちゃん許さないからな！ティアは大事な妹だ！」

「分かってるわよー。でもこんなイケメンが姉だつて言っても誰も信じてくれないと思う。」

「まあ…な。この前きた商人も驚いてたし。てか信じてなかったし」

そんなにイケメンだろうか。もしそうだとしたら好都合。

「いつの間に、こんなに大きくなったんだか…兄ちゃんを越すなんて…くっ」

「これもレティへの愛の力だな。」

「イタいわよ姉さん。昔からだけど。」

「イタくない。私のレティへの愛は絶大なのだ。妹にけなされたってへこたれない。」

「でもなあ…僕より大きいのは納得がいかないなあ…妹に背をこされるのはなあ…」

兄が沈んでいる。よっぽど私に背をこされなくなかったのだろう。私はムキムキではないけれど身長は伸びたため178センチくらいある。兄は175センチあたりだったか。あと2センチ180になれると思うとわくわくする。

「力でも負けてるし…」

「イケメン度も負けてるよねー」

「……」

リアがとどめを刺した。兄の周りからキノコの幻覚が見えるのは気のせいではない。

「いいさ…いいさ別に…自分より男らしい妹でもティアは立派な、兄ちゃんの妹だよ…せめてお姫様抱っこができるくらいの身長で止まって欲しかったけど…」

「私がいるじゃない、ディラック兄さん。」

「リノリアアアアアアアアアアアア！愛してるよおおおおお！」



「いきなり抱き上げるのはやめてよ！」

兄妹仲はいたって良好である。この調子なら悪い虫はつきそうないから、安心してリアは兄に任せるとするか。

リアと兄を置いて、私は師匠の元へ向かった。

師匠の家はお隣りさん。家を出て十秒で着く。ドアの前で、私はノックをした。

「師匠、挨拶に来ました。」

返事がない。こんな時は勝手に開けてもいいことになっているため、ドアを開き中に入ろうとすると

ドガンッ

ドアが蹴り飛ばされ、後方に跳ぶ。と同時に襲い掛かって来るナイフ。一本目と二本目を交わてナイフを取り出し、次々と飛んでくるナイフを弾き、避け時折掴んでそれで弾く。  
ナイフ攻撃が終わったかと思えば、何か黒いモノが飛んできた。

「なに　！」

ヤバいつ

黒いモノは目の前。私は体を捻ってそれを避け、それが地面につく前に後ろ向きから上空に蹴り上げた。瞬間、

ドドオォーンッ！

打ち上がったのは花火だった。

「師匠…何ですかこれは…」

もはやドアの意味を成さない壊れたドアの向こうにいる人影に問い掛けた。

そこから出てきたのは、短髪の頭に布を巻いて無精髭を生やした強面おっさん。このおっさんこそがガナトス・グラッセン52歳、私の師匠である。もともとは凄腕の冒険者だったらしいが、今では村唯一の鍛冶屋だ。

「祝いだ、祝い。馬鹿弟子が外に出てくってんだ。師匠としては祝つてやりたいもんだらう？」

「過激すぎやしませんか。」

「お前にはこのくらいで調度いいんだよ馬鹿弟子。」

んな殺生な。相変わらず過激な師匠だ。地面に散らばっているナイ

フは全部で28本。師匠、こんなにナイフ持ってたのか。にしても流石に花火は驚いた。

「あの花火は危ないと思いますけど。」

「ありや衝撃を与えて五秒で爆発するようにつくったもんだ。」

「地面に落ちてたら？」

「ドカン。」

「……」

「まあ、その時は俺がどうにかするつもりだったから大丈夫だ。」

酷く投げやりな言い方だが実際どうにかするんだろっから師匠は凄  
い。

「で、明日出るのか。」

「はい。明日の朝、村を出ようと思ってます。」

「そうか。」

師匠は強面をさらに恐くさせるように眉間にシワを寄せる。すると  
「待ってる」と言つて家の中へ入って行った。

何だろっかと思いいながらもおとなしく待つ。暫くして、師匠は何やら布に包まれた長いものを抱えながら戻ってきた。

「師匠、それは……」

「ん、剣だ。」

巻かれた布を解く。中からあらわれたのは剣だった。

「これは、師匠が？」

「ああ、俺の傑作だよ。餞別だ、持ってけ。」

投げられた剣を腕で受け止める。艶のある黒い鞘が素敵だな。鞘から剣をぬくと、輝く刀身が姿を現した。刀身に自分がくつきりと映るくらい滑らかだった。

武器にそれ程詳しい訳ではない自分でさえも高級品であろうというのが分かる。

「師匠：ありがとうございます。」

「けっ、壊したりしたらタダじゃおかねえからな馬鹿弟子が。」

そっぽを向いている師匠に心からの礼を告げ、頭を下げる。相変わらず口の悪い人だ。壊さないように気をつけようと思う。

「あと、男として行くんだよなお前。」

「ええ。」

「だったらこれから私ってのはやめろ。それだけでも印象は変わる。」

「じゃあ…俺、でいいですか？」

「おう。」

村を出たら私は男だ。自分を俺、というのにも慣れておかなくてはいけないだろう。

そろそろ師匠に別れを告げる。今まで散々世話になった分、この人には頭が上がらないものだ。何度も死ぬかと思ったが。厳しくて恐くて、昔はよく禿げるとか思っていたが、今ではその頭の安寧を祈るばかりだ。どうか、師匠が禿げずに健やかに暮らしてゆけますように。

「今失礼な事考えただろう。おい俺の頭を拝むんじゃない。だから俺は禿げてなんか」

分かっていきます師匠。その布はカモフラージュなんですよ。帰ってくる時はカツラ、買ってきます。  
今までありがとうございます、師匠。

## 愛も己も育んだ十年（後書き）

十年の間云々はいつか書くつもりです。

## 爆ぜて欲しい彼らと天使の手紙

さて今度は幼なじみにでも挨拶に行くか。そう思った私は、かつてのライバルであるメリールの元へ向かった。彼女の家は、私の家のお向かいさんの隣である。

「メリール、いるか。」

ノックしてガチャ。失礼にも返事を待たずしてメリールの家に不法侵入した私に、中で紅茶を飲んでいたところ驚いたのだろうメリールは肩を跳ねさせて紅茶を零していた。

「ちょ、ちよつとティア！何勝手に入ってきてんのよ！」

「気にするな。いつもの事だし。」

「こつちが気にするわ馬鹿あ！」

強気なメリール。昔はよく対立していたが、今では何だかんだいって親友である。彼女の家に勝手に入るのは日常茶飯事であった。

「どうしたメリールッ！つて何だ、ティアか…。」

メリールがプンスカ怒っている間にまたもや不法侵入してきたのは、一時期呪い殺そうとまでしていた憎きルーカスだった。彼はメリールのお隣りさん、私のお向かいさんである。

何故ルーカスがメリールの家に勝手に入ってこられるのかと言うと、

「何でアンタまで勝手に入ってくるのよ！」

「メリールの声が聞こえたから、何かあったのかと思って心配して来たんだ。結局ティアだったけど。」

「何もないわよ。でも、ありがと…」

「メリール…」

そう、こいつら、デキてやがるのだ。私が王都にいるレティに想いを焦がしていた横で、ギヤーギヤー喚いていたかと思いきやいつの間にかくつついていた。何がどうしてこうなったのか。

がき大將的存在だったルーカスは今やただの爽やか系好青年。何故そんないい方向に性格がイケたのか。好きな子に意地悪してしまう年頃はとくに抜けてしまい、メリールにべた惚れ。メリールも見事なツンデレに育った。切実に、爆ぜて欲しい。

「で、いきなり何なのよアンタは。」

「挨拶にきた。」

「ああ…王都に行くんだってね。アンタ、ちゃんとレティに手紙で伝えたの？」

「近々会いに行く、と伝えた。」

勿論レティと私は文通をしている。この十年、欠かした事など断じてない。文通をしているとよく相談役になったりするものだが、レティの恋愛相談はかなり私を苦しめた。レティに好きな奴ができた時に手紙を破りそうになるのをどんなに耐えた事か。

レティの手紙を破るなんて出来る筈もないが。間違えてちよっぴり破いた夜は枕を濡らした。

「ならいいわ。さっさと行って振られてきなさい。」



「遠路遙々告白しに行く親友に向かっていた何てことを言うんだ。」  
「アンタの愛は重いよ。逆にレティが可哀相だわ。」

メリールも基本レティ至上主義なのは変わらない。村にいないレティに、ルーカスが嫉妬しているのを見るのも笑えるものだ。最も私は会った事もないレティの想い人に嫉妬している訳だが。

「あー、ティアの愛が重いつてのには同意する。」

げんなりとした顔でルーカスが言う。

メリールの隣に座りメリールを抱き寄せながら、怖いものを見るようにこちらに視線を向けてくる。

全く失礼な奴だ。

十年前にレティから好意を注がれていたルーカスに私が優しい訳がないだろう。

「お前の嫉妬受けると、メリールの突撃なんて可愛いもんだった。」  
「なによ、ちゃちかったって言いたい訳？」

「怒りながら頑張って俺を罵るメリールは可愛かったんだよ。」

「なによそれ！」

「気にするなメリール、ただのマゾだ。」

「違うから！」

メリールは顔を歪めてルーカスから距離をとった。ルーカスがショックを受けているさまは非常に愉快だ。

「違うんだメリールッ！ティアと比べるとって意味だから！メリー

ルのは嫉妬は可愛い罵りだったけど、ティアは俺を静かに呪い殺すような嫉妬だった…」

「あの時はまだまだ子供だったからな。自分を制する事が上手くできていなかったただけだ。忘れる。」

本当に失礼な奴だ。十年も前なのだから忘れていればいいものを。

「忘れられればいいんだけどな…」

距離をとったメリールに近づき懲りずに抱きしめたルーカス。少々イラッとする。私もレティを抱きしめたい。

「まあ、そういう事なら別にいいけど。」

「メリール…っ」

「ん」

このバカップルが…。

こんなバカップルは置いて家に帰ろう。いつか帰ってくる時は藁人形と釘でも買っていくか。あとハンマーも。

家に帰ってきた私は店番をしている兄とリアをスルーして自分の部屋に行く。因みにうちは村では一つしかない宿屋をしている。

この村はそんなに辺境というわけでもない。むしろ国境付近で隣の国から王都への道のり途中にあるからか、結構客は来るものだ。メーリングもうちで働いている。

部屋に戻ると机にある手紙箱に目があった。先程手紙の話をしたせいか、レティの手紙が読みたくなった。

十年も文通していれば月一だとしてもかなりの量になる。一つの手紙箱に入りきらなかったから、箱は五つ。

一番古い箱の上から一枚、私が送るのより上等そうな封筒に包まれた手紙を取って読んだ。

『ティア、元気？王都にきてから今日で二年が立ちました。ティアも誕生日おめでとう。もう九歳だね。村で祝えなくてごめんね。プレゼントも一緒に贈るよ。喜んでもらえたら嬉しいな。』

二年も住んだら王都の事も少しはわかってきたよ。最近は街を探索するのが楽しみだったんだけど、お父様とお母様に怒られちゃった。一人で露店巡るの楽しかったんだけどな。

そういえばこの前、王宮に行ったよ。王都にきて初めて連れていってもらったんだけど…王様に会ったんだ。最初は恐かったけど、優しい王様だったよ。それと王宮で新しいお友達ができたんだ。エル君とカル君っていうの。ティアにもいつか会わせたいな。もしよかったら王都に遊びにきてね。

体に気をつけてね。それじゃあまた。

レティより

レティのまるっばい文字可愛い。

てかレティ可愛い。誕生日祝ってくれてありがとうレティ。プレゼントは日持ちする王都の特産お菓子で、とても美味しかったのを覚えてる。

街を散歩するレティ、両親に怒られてしょぼんとするレティ、王様の前でビクビクしながら父親の背に隠れて怖ず怖ずと出てくるレティ  
ああ、全部可愛いな。

ただ、お友達だけは頂けない。エル君？カル君？誰だそいつは。王宮でなる友達だなんて、貴族か何かだろうか。当時はこの手紙を読んで、知らない名前に奇声を発したものだ。

今でも交流はあるみたいだし、気になる存在である。勿論悪い意味で。

今度は五つ中、三番目に古い箱から手紙を取り出して読んだ。

『ティアへ

ティア、元気かな？風邪とかひいてない？王都にきてもうすぐ六年ティアと文通するのも六年なんだね。ティアの手紙は凄く私の支えになっているよ。いつもありがとう。今年の誕生日には手作りで何か編もうと思ってるんだ。何がいい？

最近魔法学校の勉強が難しくって大変なんだ。もうすぐテストがあるから余計に頑張らなきゃいけないくて、少し疲れる。ティアからの応援があつたら頑張れるかもなあ…なんて。私頑張るね。

ティアも体を鍛えてるってメリアルから聞いたけど、大丈夫？無理はしないでね。ティアが倒れたりしたら私とんでっちゃうから！

病気には気をつけて。お互い頑張ろうね。

レティより

☞

とんできてくれ！私は喜んで倒れよう！当時この手紙を読んだ私は倒れる為に修業に打ち込んだが、倒れるのはいつもの事なので大した意味は成さなかった…。誰もレティに伝えてくれなかったし。

この手紙の返事には、勿論心からのエールをおくった。私からの応援で頑張れるというならいくらでもおくる。少々やり過ぎた感があるくらいにはやった気がする。

この手紙の辺りからレティの一人称が“僕”から“私”になりはじめた。何か心境の変化でもあったのだろうか？手紙には書かれていなかったが、ものすごく気になって悶々としたものだ。

誕生日プレゼントはマフラーにしてもらった。T・Rというインシヤルをいれてもらった。勿論、ティアとレティだ。

…調子に乗った事だけは認める。

五つの手紙箱の中で一番新しい箱の中から、最近送られてきた手紙を手に取る。

この手紙は少しだけ破れている。ちょっと気分が落ち込んだ。くっ、手が震える！

『親愛なるティアへ』

ティア、相変わらず元気でいるかな？私は元気だよ。ティアと文通を初めて、なんと十年になります！うわぁー、長いねえ。魔法学校も無事に卒業して、私は穏やかに暮らしているよ。でも最近魔物の活動が盛んになってるらしいから、ティアもくれぐれも気をつけてね。この国だけじゃなく、隣のファルガンも魔族と緊迫状態にあるって聞いたから村が心配です。国境付近も魔物多くない？本当に気をつけてね？

今年のティアの誕生日は十年記念も含めてお祝いするから、奮発しちゃいます！遠慮せずに何でも欲しいの言って。

それはそうと、ティアに報告があるんだ。私

好きな人ができました。

改めて書くと恥ずかしい…

最近王宮へ行った時に会った人でね。凄く優しくて格好良くて面白くて楽しい人なんだ！名前とか、どこの人とかはちよつとした事情で言えないんだけど、とにかく凄い人なの！本当に、ティアにも会わせてあげたいな…。

十年間、本当にありがとう。大好きだよ。

あなたの心の友レティより

ぐおぎ ○い%×が\$ ￥あゝ あゝ つつつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!  
!!!!!!

私は声にも言葉にもならない絶叫をあげた。

誰だ。誰だその得体も知れない男はあつ!!!!!!!!!!!!!!

落ち着け、落ち着け私。まだレティの恋が実った訳じゃない。まだチャンスはある。そのために王都へ行くんだ。男らしくなった私をみてもらうために。

……………はあ。一度読んだが、また取り乱してしまった。レティの手紙は本当に威力が大きい。よし、楽しい方に思考を変えよう。

誕生日プレゼント…欲しいもの レティ

なんて遠慮せずに言える筈もない。  
だから図々しくも私はレティがずっと身につけているもの、という返事を送ってしまった。その後贈られてきたのは片割れのピアス。高価そうな、レティによく似合うだろう、深い蒼の宝石がぶら下がった綺麗なピアスだった。

このピアスが贈られてきた時、私がどれだけ感動したか。  
あの時は思わずレティイイイイイイッツーーーー!!!!!!!!!!!!!!と叫んだ。家族と客と師匠とメリアルとルーカスから苦情がきた。

私の耳にはレティからのピアスがつけられている。大切にしなければ。

魔物云々や魔族がどうかという話は知らなかった。兄に聞くと普通に知ってたから驚いた。確かに最近多いなと思っではいたがそんな事情があったのか。レティが心配してくれているので、ちゃんと気をつけようと思う。

最後の大好きだよ、は私を撃沈させた。そうかこれが飴と鞭というやつか。見事にレティの術中にはまった私は読んだ時、私も大好きだあああああああーーーー！！！！！！！！！！と叫んでしまった。当然苦情がきた。

今机に置かれている、ピアスと一緒にきた手紙には親友の証だと書いてあって、誕生日おめでとうの文字。

胸をよぎるのは信頼されているという喜びと、親友以上にはなれないのかという少しの虚しさ。

私はこの手紙で、王都に行く決心をした。一人前の男になるまで自分を鍛え続けると、レティが旅立ったあの日決めた。そろそろ頃合いだろう。この手紙には、王都へ会いに行く所存と村をたつから手紙は送らないでくれと返事を送った。

一番新しい手紙を鞆にいれる。この手紙を最後に、旅支度が済む。あとは明日の朝村をでて、レティに会いに行くだけ。



そつとピアスに触れ、自分の決心を確認した。

爆ぜて欲しい彼らと天使の手紙（後書き）

主人公はレディに関しては暴走します。男前じゃないですね。

多分村出てからかな…

## 饞別と旅立ち（前書き）

読んでくれている人に感謝します。

## 餞別と旅立ち

部屋の外から私を呼ぶ声がした。両親が帰ってきたのだろうか。気がつけば窓から覗く外はもう夕闇に覆われている。随分と長い間手紙を読み耽っていたようだ。

鞆を置いて、部屋を出る。宿の方に行くと、街へ仕入れに出掛けていた両親が帰ってきていた。

「お帰り。」

「あら、ただいまティア。今日いいの仕入れてきたからご馳走よー。」

「ただいま、ティア。」

ニコニコしている未だ若々しいおっとりタレ目な母と、無表情で眉間にシワが似合いそうな渋メンの父。私の場合、顔はともかく性格と表情筋は確実に父親似だ。いや、目つきの鋭さも似ているかもしれない。

父の名はロイド。母の名はロメリアという。

「ご馳走？」

今日は珍しく客が来ていないし、ご馳走を食べるようなお祝いごともあった気はしない。何かいい事でもあったのか。

「何かあったか？」

「なァーに言っちゃてんの姉さん。姉さんが明日旅に出るから、今

日はご馳走なの！」

「門出の祝いくらいご馳走にしてもいいだろう？まあ兄ちゃんにとつては悲しいお祝いだけどね……。今日はたくさん食べて明日に備えるんだよ、ティア。」

兄とリアがそう言いながら私を引っ張ってテーブルにつかせる。

父にいいのかと視線で問い掛ければ、諾と言わんばかりに頷かれた。

「今日は、特別だ。宿も閉める。運がいいか悪いかわからんが、客も来ないしな。」

その言葉に少しばかり、いや結構驚いた。旅立つ時はあっさりな方かと思っていたからだ。

「ふふ。ティア、お父さんね、結構色んな事あっさり許してるけどね、本当はすごく心配してるのよ？今日の事もお父さんが提案したの。」

「ロメリア」

眉間にシワを寄せて気難しい表情で父が母を窘める。今の母の発言は、どうやら私に知られなくなかったらしい。うちは放任な方かとおもいきや、そうでもなかったようだ。

とは言え、心配してくれているのが分かると嬉しくなってくる。

「ありがとう、父さん」

父は相変わらず眉間にシワを寄せて先程よりも渋面になっているが、怒っている訳じゃない。表情筋のせいだ。照れているのだろう。

おとなしく椅子に座っているとどんどん料理が運ばれてきた。宿屋だけあって料理は美味いし、うちの家族は大半料理が出来る。しかも意外なことに一番料理が上手いのは父なのだ。二番目は母、兄、私、リアと続く。

リアだけは料理が出来ない。何故か暗黒物質しか生み出せない。まありアはその可愛さで看板娘の役割を果たしてくれればいい、らしい。兄がそう言っていたので問題はないだろう。

全員椅子に座ってテーブルの料理を囲む。家族全員で夕食を食べるのは久しぶりだ。いつもは仕事を代わる代わるやりながら空いた時間にそれぞれ食べるためである。

その日の夜は、家族水入らずで夕食を楽しんだ。

夕食のあと、母に呼ばれて両親の部屋に行く。部屋にノックをして入ると既に父も母も中にいた。ニコニコした母が手招きでこっちへ来いと言うので、黙って母の元へ行くと思いつ切り抱き着かれた。

「母さん？」

「んー、こんなに大きくなっちゃったのねえティアは。いつのまにディラックを越したのかしら。」

「十五の時には越してた。」

「まだまだ成長しそうだし、お父さん越しちゃうかもねえ。」

「それは流石に無理だと思う。」

父は見る限り190センチあるように見える。対して母は160センチくらいだろうか。身長差が目立つ夫婦だとよく言われている。

「ティアは本当にお父さん似だわあ。顔も若い頃そっくり！勿論性格もね。」

「確かに、少し似ているな…。」

「そう、かな。」

顔はそんなに似ているとは思わなかったが、若い頃に似ているのか。ならば私も将来こんな渋メンに　　ないか。だがレティが渋メン好きだったらなりたいかもしれない。

そんな事を考えてたら、母が真剣な顔をしてこちらを見つめていた。

「ティア、レティに告白した後すぐに村に戻ってくる訳じゃないのよね？」

レティに告白した後の事…。確かにすぐ村に戻るつもりもない。そもそもレティの返事によってそれは変わらと思うが、出来ればそのまま旅を続けたいと私は思っている。世界を見る事は自分自身を広げるものだ、かつて師匠が言っていたのだ。

「レティが何て答えるかは分からない。けどその後は、色々な所に行きたいと思ってる。」

そう言うと母は、楽しそうに笑った。

「やっぱりねえ。ね、言った通りでしょう？ロイド。」

「…そうだな。」

「何が？」

「ティアは世界をまわりたいたろってことよ。」

母には分かっていたのだろうか。私の考えなど、この人にはお見通しなのかもしれない。思えばいつも、私の表情を一番に読み取ってくれるのは母だった。表情を読み取るのは父で慣れていたのだろうが。

「そんなティアには、お父さんとお母さんから贈り物があります。」

母はニコニコな笑顔を崩さずに言う。

そして体の後ろから何かを取り出し、私の手に優しく押し付けた。

「これは……ネックレス？」

「ただのネックレスじゃないわよー。結界の首飾りって言ってねえ、持ち主の意思でいつでも強固な結界を張れるネックレスなの。」

「…凄い。」

受け取ったのは、深緑の水晶みたいな石があしらわれたネックレス。頑丈そうなシルバーチェーンに繋がれている。

「いいの？こんなの貰って。」

「遠慮せずに持っていきなさい。きっとティアの役に立ってくれるから。」

「母さん、ありがとう。」

「ふふっ、どういたしまして。さき、次はお父さんの番よー。」

「……ティア、これを。」

「短剣……？」



父が差し出したのは刃渡り二十センチくらいの短剣。受け取って抜いてみると、刃は黒く切れ味が良さそうだった。黒い鞘には銀の装飾の縁取り。

「俺が昔使っていた物だ。懐に入れるか、腰にでも下げておけ…。」  
「昔？」

「お父さんとお母さんねえ、これでも昔はバリバリの冒険者だったのよー。さっきのネックレスもその時使ってたものなの。」

「冒険者だった…。」

「ちなみに、レティの両親とも旅してたのよ？」

「！」

「ネックレスはレティの母親…グレイシアにつくって貰ったの。」  
「そっか…。」

内心かなり驚いている。うちの親とレティの親が冒険者で仲間だった？そんな話今まで聞いた事もなかった。というかレティの両親は、元冒険者であんなネックレスつくれるくらいの力を持っていて王宮で国王陛下に謁見できる　一体何者なんだ、レティの両親。

昔見たレティの両親は当然の如く美男美女だった。上品で優しいグレイシアさんと体格はいいがやわらかフェイスのギルバートさんだ。ギルバートさんが金髪緑目で、グレイシアさんは銀髪碧眼だったと記憶している。この二人の髪と目の色を受け継いで、金髪碧眼の天使レティが誕生した訳だ。流石レティ可愛い。あの美貌の両親から生まれたレティはやはり天使で超絶的に可愛

「おーい、ティアー？」

「……………」

「駄目ねえこりゃ。全く、こういつところもロイドそっくりだわあ。」

「……こんな感じだったか？俺は。」

「そっくりよ。」

「……」

こうして、出発前夜は更けていった。

翌朝。

早朝に身支度を整え、腰のベルトに師匠から貰った剣をさげる。この鞘には金で縁取られていた。よく見ると父から貰った短剣と似通った装飾が施されている。短剣も剣も鞘が黒く、装飾は金と銀。もしかしたら短剣も師匠からの物だろうか？

鞆を肩にかけ部屋を出ると、結構早い時間にもかかわらず居間には既に父と母、兄とリアがいた。

「……みんな、もう起きていたのか。」

「ふふ、お見送りしなくてどうするってゆっの？ティア。」

「やっぱり姉さんってば黙って行こうとするんだから。」

「兄ちゃんにも見送りさせてくれよティア……泣くぞ。」

母は相変わらずニコニコと、リアには少し怒ったように、兄はマジで泣きそうに言われた。

「全く…こんなところまで父さんに似るなんてねえ。」

そこまで似てるのか。かつて父にもそういう時があったみたいだ。

「……村の入り口まで、送る。」

父の言葉に、全員家から出ようとする。

この調子だと、師匠やメリール達にも行ってくると言った方がいいのだろうか。昨日ちゃんと挨拶には行ったのだが。そう思いながら家のドアを開けると

ガチャ

「」「あ」「」

「……」

見事に三人ともいた。

村の入り口。

家族と師匠、そしてルーカスとメリール。静か出ようとしていたが、こんなににぎやかになるとは思わなかった。恵まれているな、としみじみ思う。

そんな中、師匠が見た感じ手紙と思われるものを差し出してきた。

「師匠、これは？」

「ギルドへの紹介状だ。お前の実力的にFからつつうのはと思ってな。これがあればもちつと上のランクから受けれるだろうよ。」

「いいんですか？」

「旅の資金はギルドで稼ぐんだろう？だつたらちまちま稼いでちゃあ王都になんか着きやしねえ。これ渡すの忘れてわざわざこんな朝っぱらに起きたんだ。受け取つとけ。」

「何から何まで、ありがとうございます。師匠。」

「振られても死ぬなよ。馬鹿弟子。」

「……師匠、室内で頭に被り物をしていたせいですね。後光が……」

「禿げてねえっ！」

師匠は一言余計なのだ。禿げてしまえ。

「でもアンタならありえそうよね。振られてショック死とか。」

「メリール、そんな事言ったらティアが死んじゃうぞ。」

貴様ら……

「姉さん、振られても強く生きてね。」

「振られても兄ちゃんが慰めてやるから！安心して帰ってきなさい！」

「自暴自棄になっちゃ駄目よー、ティア。」

「……」

何だか非常に悲しくなってきた。何故皆、私が振られる事前提なのか。誰ださっきちょっと感動していたのは。私か。

「…ティア、頑張れよ。」

「父さんっ！」

ガシッと父にだけ抱擁して、別れを告げる。  
そして全員を見渡して私は宣言した。

「行ってきます。私は、絶対に、必ず、愛を掴んで、帰ってくる。」

グッと親指を立て、前に突き出した。これは誓いだ。私は愛を掴むまで帰らない！

手を振り、後ろを振り返らずに歩きだす。この日から私の旅が始まった。

いざ、王都を目指して。

「ふふ、行つたわねえ。どうなると思うっ？」

「……」「振られて帰ってくるに一票」「……新しい愛を掴むに、一票。」

「大穴ねえロイド。じゃ、私もそこに一票。」

「万が一レティと姉さんがくつついても男と女だから問題無いはずなのに、何故か禁断の香りがするんだけど…。」

一同黙る。

「それは確かにあるわね…。あんなイケメンになって、村でどんだけ女の子に人気になってるか分かってるのかしらあの子。」

「実際どのくらいなんだ？」

「ファンクラブ出来てるくらい。」

「……」

メリールの言葉に黙り込むルーカス。俺より人気って…と呟くのを聞かれて、メリールに足に踵落としを決められ悶絶する。

「ガナトス…ティアはどのくらい強くなっている？」

「あ？サバイバルは余裕だし、あれならキングオーガの群れに放り込んで生き残れる。もともと才能もあった。お前の息子、いや娘だしな。」

「そうか。ならいい。」

「強くなったわねえ。」「本当に、たくましくなったんだなあ…ティア…。くつ、やつぱりせめて身長だけは…」

「兄さん、またキノコになっちゃって…」

実質ちゃんと心配してるのは、ロイドだけのようなものだった。

## 饞別と旅立ち（後書き）

師匠の年齢五つあげました。52ですね。

閑話・嫉妬と呪いの藁人形（前書き）

幼少期。ルーカス少年です。ティア視点じゃありません。



## 閑話：嫉妬と呪いの藁人形

ルーカスは恐れおののいていた。目の前で、自分を無表情に見つめる少女に。

それは偶然の事だった。

村のがき大將的存在であるルーカス少年は、村の天使的存在であるレティが犬っころに吠えられている場面に遭遇した。

ルーカスはレティに度々悪戯をしたりしていたし、レティを男の癖になよなよしやがってなどと思っていた。

レティは可愛いかもしれないが男である。その可愛いさでちやほやされているレティがあまり気に入らなかつたのだ。

多分村の男の子は素直になれないだけだろうが、少なくともルーカスはそう思っている。

だがそんな彼も村のがき大將。リーダーである。レティが犬に吠えられて転んだ場面を放ってはおけなかつた。心根は優しいルーカス少年なのだ。

「こら、あっちへいけっ！しっ、しっ！」

犬つころを追つ払った後、転んで涙ぐんでいるレティに手を差し延べる。

「ばけーつとしたレティに声をかけると、慌ててその手につかまった。

「あ、ありがとうルーカス…」

「べつに。ケガはあんの？」

「あつ、だいじょう…いたつ」

どうやらレティは転んだ時に膝を擦りむいたようだった。

仕方ないため息をつき、レティの手を引いて井戸に向かう。

「えっ、えっ？」

何が何だか分からないレティは、痛みに涙を滲ませながらもついていく。

両膝からは血が出ていた。

「手当するから、こいよ。」

そんなこんなで井戸に到着。水を汲んで、膝の傷口をその水で洗う。やはり傷口には染みるのか、レティは辛そうな顔をしていた。結構擦りむいていたようで、痛々しい。

傷口を洗うと、家から包帯を持ってきて巻いて手当完了だ。

「あの、ありがとね。ルーカス。」

「べつにいいから、それじゃ。」

意地悪してる相手に善いことをしたからか、少しぶっきらぼうになっているルーカス少年。

レティはそんな彼の後ろ姿を、頬を染めて見つめていた。

それから、幾日かたったある日。村の女の子の中では強気でちょっと生意気なメリールが、ルーカスに食いかかってきた。メリール曰く、レティはアンタなんかにあげないんだからね！との事。ルーカスはその台詞を聞いて、なんだコイツとしか思わない。それも当然、ルーカスはただレティに親切にも手当をしたただけなのだ。悪戯はまあいいとして、最近はやってはいない。

「なにいつてんだよお前。レティがなんだって？」

「だからっ！レティは、アンタなんかに、あげないっていつてるのっ！！分かったらレティに近づかないでよ！！」

「はあ？」

「メリール、そこらへんにしといて。」

メリールが暴走しているのを冷静な口調で止める少女、いつも無表情のティアである。

「なによティア！アンタもこのルーカスのアホの味方なの！」

「それはない。ていうかレティ待たせてる。はやく行こう。」

「うっ…それもそうね。レティまたせちゃダメだわ…。ルーカス！あとでおぼえておきなさい！」

そういうやり取りをして少女達はルーカスに背を向ける。意味が分からんと、イライラしているルーカス。気がつく少女の

一人、ティアがルーカスを振り返って見つめていた。  
なんだと思って視線を合わせるルーカス。瞬間、固まった。

少女の瞳は冷え切っていた。いつも無表情な彼女だが、無表情とはまた違う、相手をすくませる冷酷な瞳でルーカスをただ見つめる。  
ルーカスは動けず、たらりと汗を流した。

「.....レティに手、  
だしたら、ころす.....」

存外低い声で、呟くように告げたティア。その声までもが冷え切っていた。そんな低い呟きでも、ルーカスにはハッキリ聞こえた。

固まったルーカスの前に歩いてくるティア。そして彼の頭に手を伸ばす。

ブチッ

「.....ってええっ!!!!!!!!!!!!!!」

伸ばされたティアの手は、ルーカス髪の毛をむしり取っていた。ブチブチ、ブチッ。これでは若禿げになってしまうと危惧したルーカスは頭を押さえながら後ずさる。

「なんなんだよいきなりっ!!」

怒鳴るルーカス。しかしティアはそんな怒るルーカスを無視し、最

後に一瞥して去って行った。  
残されたルーカス少年は、ただ頭を押さえて痛みに耐えるしかなかった。

その後ルーカスは鏡で頭を確認したり家の手伝いをしたり村の子達と遊んだりで忙しく、空はもう赤みがかかり暗くなってきた。  
家に帰る為に歩いていた途中、何かの音がきこえてくる。

カーン…カーン…

何の音だろうか。気になったルーカスの足は段々その音に引き寄せられていく。  
方向は森の方である。今の時間帯森に人がいるはずはないのだが、その音は確かに森からきこえていた。

カーン…カーン…カンカンカーン…

近付いて分かったのは、何か固い物を叩いている事。  
ルーカスは怖いもの見たさにより、それが見えるところまで近付いていった。

嫌な予感がルーカスを襲う。恐れ。恐ろしい気分になる。  
ルーカスは覚悟を決めて、目をつむったの先にいるであろう何かに、目を開いた。

それはルーカスが思い描いていた恐怖より、恐ろしいものだった。

カーン…カーン…カーン…カーン…

無表情でひたすら藁人形に釘を打つティアが、そこにはいた。その動作は何かを藁人形に籠めるかのように力強い。

だが鬼の形相をしている訳でもなく無表情。それがよりティアを不気味にして、ルーカスに寒気を感じさせた。まだ表情があるほうでした。

ふと、ティアが口を動かしているのに気付く。

（なにを言ってるんだろう）

気になったルーカスは、ティアに気付かれないように更に近付いてゆく。

ボソボソとしている声がやがて鮮明にきこえるようになった。

「…ルーカス死ね…ルーカス死ね…」

(つつつつ！！！！！！！)

あげそうになった悲鳴を必死に抑える。今悲鳴をあげたら本当に死んでしまいそうで怖い。

そうでなくとも、虚ろ目で低く自分を呪っている少女は、まだ八歳のルーカス少年の心に深いトラウマを植え付けた。

「……………かみ、たりなかったかな……………」

唐突に音がやみ、ティアがそう呟く。

髪？一体誰の

「うつつ……………」

ルーカスは小さく声をあげてしまった。

ティアがひたすら釘を打ち込んでいる藁人形を見て、だ。

ティアが言葉通りに釘付けにしている藁人形。何故か黒かった。

そう、髪だった。藁と藁の間に大量にはさまっている髪。

ルーカスはその髪の毛に心当たりがある。あれは昼にむしり取られた自分の髪ではないか。十中八九ルーカスの髪の毛だろう。何せティアが呪っているのはルーカスである。

自分の髪の毛で黒く飾られた藁人形。

釘を打たれる度にルーカスは自分が打たれているような気がして、胸を押さえた。どうやら先程の小さな悲鳴は、ティアにはきこえていなかったらしい。

「ルーカス死ね……ルーカス死ね……ルーカス禿げる……ルーカス死ね……」

ルーカスは頭を押さえた。ティアの吐く呪いによって、今にも自分の頭が禿げるのでは思った。

「……………だれ」

ビクウツ！

その冷えた双眸がルーカスを捕らえた。  
ルーカスは後ろに走り出した。ティアが追ってくる気配はない。それでも家に向かって全力で走った。

その夜、ルーカス少年は布団を頭まで被って寝た。寝たと言っても快眠とは言えない、何度も夜中に起きてしまう浅い眠りだ。眼をつむるとあの光景が蘇るのだ。

布団の中で震えながら夜を過ごした。震えと息苦しさは恐怖のせいだ。明日にはなくなっているだろうか。そう考えながらルーカスは浅い眠りに就いた。

その息苦しさは布団のせいだろうということに、ルーカスは気が付かなかった。



翌日、寝不足のルーカス。あまりにも眠れない夜を過ごしたためか、目の下には濃い隈が浮かんでいる。

どうせ眠れない。ならば気分転換に外を散歩しよう。そう思ったルーカスは外へ。外の空気はルーカスの陰鬱な気分を幾分か和らげてくれた。

ルーカスはレティの事を考える。もはやレティに対して悪感情はない。

あんな恐ろしい奴に惚れられて哀れみすら感じている。むしろ手なずけている時点で尊敬の念を覚え始めていた。

だが、だからと言ってレティに近づく気は微塵もない。ティアの呪いを受けたくはない。

そんな事を考えていたら、前方からいつかのメリールが歩いてきた。

「あつ、ルーカス！」

ルーカスを目にした瞬間、目つきを鋭くして睨みつけてくる。

そんな睨みは、昨日のティアに比べれば可愛げのある怒り方だと思う。

「アンタきの言ったことおぼえてんでしょね！」

キシヤーツと威嚇してくるメリールを見て、猫みたいだな、とルーカス思った。表情豊かなメリールは今のルーカスにとって好印象だ。

「可愛いな。（罵倒が）」

「だからレティに近付くなって……ええっ！は！？ななな何が！？」

「お前がだけど？（威嚇している姿が猫みたいで）」

「え、えっと、あ、う……」

勢いを無くしていくメリール。顔を下にうつむけていく。

どうしたのかと思ったルーカスがメリールの顔を覗き込む。メリールの顔は真っ赤だった。

（あ、可愛いな。）

今度は素直にそう思った。真っ赤に染めた顔をあげて、キッと涙目でルーカスを睨みつける。

「ああああなたなんか、そ、そんなこと言われたって、嬉しくないわよっ！」

どきゅーん

今この瞬間、ルーカス少年は体の中に正体の知れない何かを感じた。何故かこの少女、メリールをイジめたい。違う。怒らせるより、恥ずかしがらせて真っ赤な顔をみたい。これがきつと恋なのだ。今ではメリールがどうしようもなく可愛く見える。

幼いながらにそんな感情を覚えたルーカスは、後ろに走り出そうとしたメリールの手を掴む。

「メリール。」

「な、なによアンタ！てえはなして！」

「レティには近付かない。」

「はなしっ……え？」

「そのかわり、メリールのそばにいていい？」

「え、は、なな何でアンタがそばに！」

「メリールのそばにいれば、俺がレティに近付かないかみはれるし。」

「……それも、そうかも……」

「だろ？」

「うう……わかったわよ……」

しかしメリールは気付いていない。ルーカスと一緒にいたら近付けさせないために、自分もレティに近付けないという事に。

言質は取った。考えるのは、メリールにどう猛アタックしてオとすか、のみ。押せば何とかなる気がする。

今日はよく寝れそうだ、とルーカスは密かに笑った。

「よろしく、メリール」

「ふん………しょうがないわね……」

多分ルーカス少年の性格が少し変わったのはここらへんだろう。爽やか溺愛属性がつくのに、そう間もない事である。

ぶるぶるっ

「どうしたのよルーカス、風邪？」

「いや、昔の事を思い出してね。」

「昔？」

「ああ、ティアに嫉妬受けた時の事…」

「藁人形？」

「ああ…」

今でも思い出すと苦い出来事だった。あの嫉妬は二度と受けたくはない。

その翌日に、メリールに会ったのは幸運だった。あれから猛アタックし、なかなか素直になれないメリールをどろっどろに甘やかして三年前やっと恋人になれたのだ。ルーカスが十五歳、メリールは十四歳の時だ。

「それと、メリールにくっつき始めた時の事も思い出してた。」

「はあ？なんでそんな時の事…」

「あの時のメリール、可愛かったなあって思ってた。」

「何言ってる…」

「顔真っ赤」

「！」

腕の中で真っ赤になり暴れる恋人を、ルーカス青年は優しく笑いながら抱きしめた。

閑話：嫉妬と呪いの藁人形（後書き）

ティア恐っ

あれですね、制御が出来なかったんですね（笑）

ルーカスの髪の毛は茶髪ですが、藁人形に詰められているのは暗くて黒に見えただけです。

ルーカス…リア充が…

道で黒熊と出会った（前書き）

色々日目茶苦茶な主人公です。

戦闘描写がありますが、サラッとです。サラッと。

## 道で黒熊と出会った

村から一番近い街であるヴィーニットには馬車で一日くらいはかかる。

ヴィーニットは隣国との交易場所にも使われているため、結構な規模の街だ。私も仕入れなどで何度か行った事があるが、市場が賑やかで人の行き交いが多い街だった。

今の領主がきつと徳のある人物なのだろう。

ヴィーニットには冒険者ギルドがある。私はまずそこに登録するつもりだ。ギルド登録自体は12歳から出来るが、私は修業三昧だったため登録はしていない。

そういえば、ギルドに登録する際私は男として登録する。師匠の言っていた通り“俺”と言うのに慣れておいた方がいいかもしれない。これから口に出す時は“俺”で統一しよう。自分がどんな女から遠ざかってゆくが気にしない。私が目指しているのは、男もとい漢なのだから。

ギルドに登録したら、王都への資金稼ぎと経験積みのために依頼を受けようと思う。

旅の資金？そんなものは貰っていない。師匠も父も母も、戦闘やサバイバルのための餞別はくれたが、金は貰っていない。

師匠には、

「そんなもんは何とかなる。ならなきゃ野宿でもしてろ。」  
と言われた。

まあ、何とかなるだろう。私は狩りなどをして獲物の部位とか売っていたので、金はある程度ある。

それでも王都への道のりは長い。普通一ヶ月くらいはかかる。王都へ進む中、宿代やら何やらがあるため資金稼ぎは必須だ。

さて、話は変わるがヴィーニットには隣国からの商人も来る。そのためヴィーニットへの道は整備されていて比較的に安全性は高いと言える。と思っていた筈なのだが、

「金目の物全部置いてきやあ命だけはとらねえでやるぜえ兄ちゃん。」

「今日、多くないか。」

「ああ？何言ってやがんだテメエ」

「こつちの話だ。ところで貴様らに荷物をやる気はないのだが、どうするべきだろうな。」

「チッ、おいお前ら！やるぞ！」

こんな盗賊紛いの奴らに襲われるのは今日で三回目である。まだ村を出て一日もたたないうちにここまで頻繁に盗賊に絡まれるとは。私は盗賊に縁でもあるのか。くつ、こんな盗賊じゃなくてレティに会いたい。

ヴィーニットへの道のりは半分くらいは進んでいる。その間に三回だ。些か縁がありすぎやしないだろうか。

「うおらあー！ー！」

「きええー！ー！」

「かくごおおー！ー！」



盗賊共が三人同時に襲い掛かってきた。一つだけ奇声がきこえた気がするが気にしないでおう。

剣が二人、斧が一人だ。私は後ろに大きく跳んで全ての攻撃をかわす。

その間に腰にさしてある投げナイフを何本か抜き取って投げた。

ナイフは盗賊共の肩や腕や腹に食い込んで、動きを停止させた。すかさず蹴りを叩きこんでゆく。

あつという間に盗賊共は地面の恋人である。弱かった。

「ぐえっ！……げほえ……」

それにしても、おかしい。いくら偶然にしたって整備されている道に、こんな短い間で頻繁に盗賊が現れるものだろうか？

しかも隣国との交易のためにこの通路は重用されている。途中にはヴィーニットの兵士の詰め所もあったはずだ。

「まあ、そんな事を考えても仕方がないか……」

そんな事よりこの盗賊共をどうするか。詰め所にも突き出すか、放置か。

放置でいいか。わざわざ突き出しにいくのも面倒だ。時間を食うのは御免だ。私はハイペースで王都に行くため、先に進む事にした。何せ、愛しのレティが私を待っている。盗賊などに構っている暇はない。

「む……」

そう思っ歩き始めたのだが、左側の林から不穏な気配がする。気配の探知は修業で磨いたためある程度探知出来る。何か大きめな物体のようだ。

ここまでの距離はおよそ二十メートル程といったところか。

木々が邪魔になって姿は見えない。

暫く待ってみるとモサモサした物体が目の前に姿を現した。

「今日は熊鍋か…」

三メートル強の、ブラックベアだった。非常に珍しい。熊は熊らしく、山にでもこもっていいものを。今日は何かと危険な一日になりそうだ。

ブラックベアは言葉通り黒い熊である。だがやはりただの黒熊ではない。

ブラックベアは熊業界ではトップレベルの熊だ。無駄に巨体だしやたら狂暴。レッドベアやグリーンベアなどと言うそこら辺の熊と一緒ににもらっては困る熊なのだ。

「ガアオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

物凄い雄叫びをあげられた。威嚇か。熊の癖に生意気な。

鋭利に尖った爪と、今にも私を噛みちぎりそうなギザギザな歯に涎を滴らせながら熊は突進してきた。熊にしては速い。三年程前に山中でブラックベアと戦った事があるが、その時は辛勝だった。あれは流石に死ぬと覚悟したものだ。

この熊は雷の性質を持っている。爪に纏わせた雷に触るとビリビリして痛い。掠っても痛い。

だが、昔のままの私ではない。

ビリビリした爪をひと振り迫ってくる。あの爪はあたったら怪我で済みそうにない。

ブォン、と音をたてて目の前を爪が通りすぎた。避けていなければ本当に危ない爪である。近くにあった木が見事に折れ、折れた部分は焦げていた。

私は熊から距離をとるために後ろに大きく跳ぶ。それを追って熊は、四足になり凄いスピードで迫ってきた。

「はっ！」

眉間を目掛けて物凄い速さで突きを連発し、今度は熊が後ろにぶっ飛んだ。木にぶちあたって痛そうだな。そうしたのは私だが。

師匠から教わったやり方で倒してみたが、効いているだろうか。体の中の気を練り上げて鋭い突きを放つ。

気とはいっても人間は皆多かれ少なかれ持っているという魔力の事だ。

私は師匠から魔力を 練り上げる技を授かっている。師匠によると魔力は極限まで練り上げる事で全く異なる質のものとなり、強力になるそうだ。ただし色々と便利ではあるが魔術は使えない。

詳しい事はよく分からないが習得するのにかなり苦労したのは確かだ。

「グォ…オ…」

それはさておき、先程の突きでぶっ飛んだ熊を煮て鍋にでもするか。私は父から貰った短剣を抜く。熊を捌くという初仕事である。

私は起き上がれない熊の上に跨がり、とどめを刺すため短剣を振り

下ろそうと

「ガウ……」

「……」

何だ熊。やめろ。そんなつぶらな瞳で私を見るな。

「がう……」

この熊、先程まではただの狂暴な暴れ熊だった筈。だが今のこの熊はつぶらな瞳をしたただの黒い熊。先程見られなかった知能のかけらがその瞳には見えた。

熊は私の手の中にある短剣に目をとめた。短剣をジーツと見ていると、何を思ったのか熊はゆっくりとその目を閉ざしたのだ。さも、『早く殺りな。覚悟は出来てるぜ』と言わんばかりの様子である。

「熊、貴様……」

私が熊を見つめながら呟くと熊は目を開いた。そして首を傾げてこちらを見つめかえしてくる。

もしや、この熊私の言葉を理解しているのか。

「熊、俺の言葉が分かるか。」

「ガオン」

「ほう……お前は俺に負けた。勝者である俺に従うと？」

「ガウ」

熊はまたしても目を閉じ、私のとどめを待っている。

面白い。ブラックベアは確かに熊業界の中でトップレベルではあるが、知能は低く狂暴だ。事実この熊だって先程までは暴れていた。だが今はこうして私の言葉を理解し、それだけでなく服従の意まで示した。人間の言葉を理解する熊など聞いた事がない。全くもって不可思議な事である。

私は即座に決めた。この熊を、共に連れて行くと。熊としての実力も申し分ない。ブラックベアは本来、冒険者Aランク級のモンスターである。

「ならば、一緒に来るか？」

熊が目を見開く。そして吠えた。威嚇のではなく、歓喜の雄叫びを。

「ガオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！」

「そうか。では行くぞ。レティの待つ王都へ共に。」

「ガウ！」

こうして私と熊は、仲間となった。

## 道で黒熊と出会った（後書き）

はい、熊が仲間になりました。熊は強いです。主人公はもっと強い  
です。

熊が喋ったりする予定はありません。

黒い稲妻（前書き）

熊回…？

黒い稲妻

シツツツツツツツツツツ

揺れる。風を切り、周りの景色を置いていく。想像していたよりもずっと速い。

「グオオオオオオオオオオツッ！！！！！！！！」

今私は熊に乗っている。何せ３メートル強の熊である。私が乗っても全然苦しそうな様子がなかったのだ、熊に乗って移動する事にしたのだ。

しかし想像以上に速い。やはり流石ブラックベア。赤とか緑のようなカラフルなだけの熊とは違う。

そのかわりもの凄く揺れるし風の抵抗も強いが、そんなもの私はあまり気にならない。

「しかし……これなら予定より早く着けそうだな。」

普通に歩いて行く予定だったが、これなら日が暮れる前に着けるかもしれない。

もともと野宿するつもりだったが、宿のまともな食事を食べられる  
 と思えばテンションも上がるというもの。

日が暮れる前に着いたらギルドの登録も今日中に済ませてしまおう。

今日はこの調子で一気にヴィーニットまで直行だ。



「ガウ！」

「む？どうした熊。」

「グオン！ガウガウ！」

熊が何かを伝えようと停止する。熊は前を見つめながら吠えていた。何か障害物でもあるのだろうか。そう思った私は熊の示す方向に目を向けた。

「あれは……」

前方約五十メートル程先に何人かの人が見えた。

荷台を引いた馬車に、武器を持ち群がっている人間とそれに応戦していたと思われる冒険者らしき人間。多分賊に襲われているのだろう。自慢じゃないが私の視力はかなりいいのでハッキリと見える。だが視界にとらえたのはそれだけではない。賊も冒険者も同じ方向を見て固まっている。

「あれは……オーガか？」

普通のオーガ自体はCランク級で赤い鬼のモンスターである。その上にナイトオーガというBランク級の濃い赤のオーガがいる。オーガより大きめで角もでかい。

しかし今見ているオーガは普通のオーガにしては、かなり大きい。違う、あれは普通のオーガではない。ましてやナイトオーガでもない。

「キングオーガか…」

キングオーガはAランク級。赤黒いのオーガだ。ナイトオーガより大きく狂暴。ナイトオーガが五体いてもキングオーガには勝てない。というか普通こんな所にはいない筈のモンスターである。魔族領や一部稀な地域にしかでない。

キングオーガを目の前にして、賊も冒険者も動けていない。あの様子では全員キングオーガの餌となるだけだ。

「ヤバいな、あの連中。熊！」  
「ガウ！」

突撃！

ドドドドドドドドッ

「ガアオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！！！」

熊が雄叫びをあげながら駆ける。トップスピードだ。駆ける前足には雷が走っていた。

そのまま物凄いスピードでキングオーガにぶち当たりキングオーガが横に飛ばされた。

そんなスピード出して私を乗せたまま体当たりするとは。まあ、無傷だが。

「ギャウウ…」

熊の体当たりをくらってもキングオーガは起き上がった。流石はAランクと言っべきか。だがそれなりにダメージはあったようで、ふらつきながら立ち上がった。

奴は熊と私を見て殺気と敵意を剥きだしにする。敵と認定されたか。当たり前だが。

奴と戦う為に私が剣を抜こうとすると、熊が私の前に立ち塞がった。

「熊、どうした。」

「ガウガウ、ガウ！」

「ここは自分にいかせろ、と？」

「グアウ！」

「……そうか。なら存分に殺ってこい。負けるなよ。」

「ガオン！」

私は剣にかけていた手を離した。熊は譲りそうもないし、自信があったように見えたからだ。

被害が来ないように固まっている連中の所に下がつて、高みの見物といかせてもらおうとしよう。

「グギヤオオオオオオオッ!!!!!!!!!!!!!!」

キングオーガは殺気を漲らせて熊に襲い掛かる。熊はそれに応戦。熊とキングオーガの一進一退の激しい攻防が始まった。ただ、キングオーガの金棒はリーチが長い。ため熊に少し不利だろうか。しかし熊はそれを持ち前の俊敏さで翻弄していく。

「なんだよ…あの化け物は…」

「聞いてねえぞこんなの！キングオーガにブラックベアなんてモンスター、餌にされるだけだ！」

「と、とにかく、逃げようぜ！クソッ、あのジジイ…」

目の前で戦っているAランク級のモンスター二体に、激しく動揺しながら騒ぎ立てる賊共。うるさい事この上ない。

「静かにしろ。逃げるかあれに巻き込まれるか、二つに一つだ。」

「な、なんだよてめえ…」

「どっちだ。巻き込まれる方なら投げ込んでやるが。」

「や、やめろ！腕引つ張んな！お、おまえら！ずらかるぞ！」

「お、おお！」

賊共は逃げ出した。

せっかく投げ込んでやろうとしたのだが。邪魔物はいなくなった。

再び熊とキングオーガの戦闘に目を向ける。

熊とキングオーガの両手が組み合わさり、力比べとなっていた。キングオーガの金棒は熊に吹っ飛ばされたみたいだ。双方共に血に塗れている。

「ギャヴォオオオオオオオオツッ!!!!!!!!!!」

「グアオオオオオオオオオオオオツッ!!!!!!!!!!」

両者の力は拮抗していたが、段々と熊がおされていく。どうやら力はキングオーガの方が強いらしい。

「ギヴォオオオオ!!!!!!!!!!」

熊がキングオーガの力に負け、体当たりをかまされる。

「グ、ガアオオ…」

熊は後退するも何とか踏み止まった。地面には熊が耐えた形跡が残る。

こんなに傷を負った状態で、あの俊敏さがだせるのだろうか。力はキングオーガに負けている。奴も同じように傷を負っているとはいえ、状況は不利かもしれない。自信ありげだった熊が、負けるとはあまり思っていないのだが。

そう考えていると、熊の様子が変わった。爪のビリビりは相変わらずだが、纏う雷がどんどん大きくなり腕を覆った。

しかもその雷が黒みを帯びてゆくのだ。段々と黒に近づく雷はやがて完全なる黒に変わる。

「もしや…」

熊が両腕を天に振りかざし雄叫びをあげると、黒い雷は腕だけにと

どまらず一層大きくなり、天に放たれる。雷は空に吸い込まれ、轟いた。

天からキングオーガに向かって一直線に降り注ぐ、巨大なる黒い雷。あれは

「あれは、ブラックサンダー《黒い稲妻》……!?」

私は思わず驚愕の声をあげる。ブラックサンダー《黒い稲妻》とはブラックベアやブラックドラゴンといった何かしら黒くて雷属性を持っているモンスターが使う技である。

ブラックベアのブラックサンダーは見たことがあるが、今しがた熊が使ったブラックサンダーとは全く異なる。

昔見たブラックベアのはもっとショボかった。こう、両手からビリビリッと雷が向かってくる感じた。

だからわたしが驚愕したのは熊がブラックサンダーを使った事ではなく、その威力だ。

熊の使ったブラックサンダーは、最早ブラックドラゴン級と言ってもいいくらいではないか。

「グエギヤオオオオオオオオツッ……!」

キングオーガの断末魔の叫びが辺りに響き渡った。キングオーガがいた場所には黒い炭か灰のようなものしか残っておらず骨さえもない。

訪れた静寂に、キングオーガの断末魔の叫びだけがこだましていた。

後に残るのは唖然とした私とキングオーガに勝った熊と空気になっていた冒険者一行。

「ガアオオ！ガウガウ！」

熊はキングオーガに勝った事が嬉しいのか、喜悦を滲ませた声をあげて私の元へ擦り寄ってくる。

「ガウ……」

「……熊、よくやったな。」

「ガウ！」

死闘の果てに勝利をもぎ取った熊を労い、頭を撫でてやる。今は四足なので私にも届く。少しやり過ぎた感じがいなめないが勝ったからよし。

熊の頭を撫でていたところ、熊がかなりの怪我をしているのを思い出す。

結構キングオーガの奴にボコボコと攻撃されていたではないか。

「熊、怪我の具合はどうだ。やはり痛むか。」

「ガオン！ガウガウ、ガアーウ！グオウ！ガウガウ！」

いきなり身振り手振りを始める熊。グルルと唸ったり、手をビリビ

りさせて大きく振ったり、力を入れているような様子を見せる。成る程。

「つまり、キングオーガの奴に傷を負わされたがブラックサンダー《黒い稲妻》を放つ為、体に雷を溜め込んでいたらみると怪我が治っていった、と？」

「ガウ！」

「「「何でそれでわかるんだよ！！！！」」」

「む？」

「ガウ？」

今ツッコミをいれたのは誰だ。と思い熊と周りを見渡す。すると何故か息切れしている冒険者一行がそこにはいた。



## 黒い稲妻（後書き）

ブラックサンダー 《黒い稲妻》

って駄菓子がありますよね。美味しいです。あれ好きなんですよね私。  
女性に人気らしいですよ。

…黒とか雷とか言ったら、何か出しくなっちゃいまして。

熊回ですみません。主人公実況しかやってない。

**冒険者三人組、ツッコミは主に影薄（前書き）**

少し間があいてしまいました。

あと、後書きが長いです。無駄に。

## 冒険者三人組、ツツコミは主に影薄

息切れしていた冒険者一行はどうやら護衛だったらしい。馬車の中には商人夫婦がおり、ヴィーニットへ行く途中であつたとの事。商人夫婦はまだ呆然としながら熊を見ている。ポカーンとあいた口が塞がりそうもないのを見ると、暫くは固まったままだろう。

全力のツツコミをいれてくれた冒険者達とは、なんやかんやで自己紹介に至った。

「先程は失礼したね。俺はドリズ・ガルド。冒険者だ。先程は助けてくれて感謝する。」

「僕はカイン・ゲルトナといいます。同じく、危ない所を助けて頂きありがとうございます。」

「ミア・ライディンよ。餌にならなくてよかったわ。ありがとう。」

ガルド氏はガツチリとした体格で焦げ茶短髪糸目の三十代くらいのおっさんだった。その糸目でちゃんと見えているのか？身長は私より少し高いくらいだろうか。

ゲルトナはヒヨロツとした棒人間のように存在感希薄で、緑色の長髪を後ろでひとくくりにしている優男だった。これは、力をいれたらポキッと折れてしまいそうな男だな。

ライディンさんは、うねった赤い髪をポニーテールに結い上げたボンキュッボンの色気漂うグラマーな女性である。見た感じ姐御肌そうで姐さんと呼ばれていそうな人だ。

ちなみに三人に対する敬称が違うのは何となくである。特に意味はない。それはともかく、三人が名乗るので私も名乗っておこう。

「ティアレス・クレイン。通りすがりの旅人だ。こっちは先程道端で出会った熊だ。礼は熊に言ってくれ。」

「ガウガウ！」

熊も元気よく挨拶する。この熊にも会って数時間だが、慣れたものである。

「あー、それブラックベアですよ？Aランク級ですよ？」

「そうだが？」

「いやそうだがじゃないですから！普通そんな熊手なずける人間いないですから！」

ゲルトナが身を乗り出して興奮気味に叫んでくる。だが熊を見ては青ざめて少し後ずさる。彼は随分と見た目にそぐわない気性みたいだ。

「まあまあカイン落ち着けって。それで、そのブラックベアはクレイン君の熊か？」

「ガウ！」

「だそうだ。」

「ねえ坊や、その熊噛み付いたり引っ掻いたりするのかい？」

「どうだ、熊。」

「ガウ！」

「そんな低脳な事はしないそうだ。」

「普通モンスターって知能低めでしょうっ…ブラックベア狂暴な筈なんですが！…僕がおかしいんですかね？」

どうやらゲルトナはただの希薄な奴ではなく、ツツコミ担当だったらしい。折れそうな外見とは別に彼のツツコミスキルはおおいに發揮された。人は見かけによらない、とはよく言ったものだ。

「はあ……それで、結局クレイン殿は何者なんですか？」

息を整えたゲルトナは存在感を若干濃くして言い放った。濃くなったのは本当に少しだが、警戒したのだろう。助けたとは言え、（助けたのは熊だが）いきなり出てきたと思えばブラックベア引き連れられているのだ。無理もない。

「何者とは？」

「いやいやいや、ただの旅人がブラックベア手なずけている訳がないでしょうに。もしや名のある方？しかし名前は聞いた事ありませんし……」

名のある方。ゲルトナは少し勘違いしているようだが、私は今日村を出て王都を目指し旅に出た全くの田舎者である。一日で名が売れる筈もない。何せまだギルドに登録すらしていないのだから。

しかしガルド氏もライディンさんも、うんうんと頷きつつ首を傾げている模様。ブラックベアを倒す事は結構凄い事、と認識されていると思うべきか。熊を見る度に注目されるのは面倒なのだが。

「もしやクレイン君は魔術師か？」

「…何故だ？」

私の出で立ちをみて魔術師と判断するのは如何なものだろうか。腰には剣を引っ提げている訳だし、格好もゲルトナのような魔術師系

が着る服装ではない。

ローブを着て魔道具らしき腕輪をしているゲルトナは、見た目通り魔術師なのだろうが。

「いや、な。魔術師なら召喚か契約が出来るだろう？魔術師には全く見えないが。」

「そういう事か。だが俺は魔術師ではない。」

「じゃあ坊やは一体何者だって言うんだい？」

……先程もだったが、坊やと呼ばれた。やはりライディンさんは姐御だったか。

「むしろそのブラックベアをどうやって手なずけたのが気になりますね……」

顎に手を添えて唸るゲルトナ。眉にシワを寄せた表情は神経質そうな学者を思わせる。やはり見た目にそぐわない。

熊と私の関係ならばそう悩む必要など決してない。何故ならこれ程単純明快な事はないからである。

「それなら簡単に説明できる。」

「え？何なんですか？」

興味津々に聞いてくるゲルトナと、何だ何だと言わんばかりに視線を向けるガルド氏とライディンさん。  
ならば説明しよう、私と熊の関係を。

私は傍らにいる熊に目を合わせる。熊が頷き立ち上がった。

熊が熊パンチを放つ。相変わらず速い。私はその熊パンチを受け止め熊の腕をそのまま掴み、引き寄せる。熊が前のめりになりバランスを崩した。

その崩したバランスを立て直す前に熊の懐に入り込み、その身長も体重もありすぎる熊を、背負い投げた。

ドオン、と熊が背中から落ちる音が鳴り響く。  
そしてゲルトナ達の方に向き直り告げる。

自分の胸に拳をやり、

「勝者。」

熊の元へ行き指をさす。

「敗者。」

そして熊が倒れたまま持ち上げた拳に自分の拳をぶつけ、

「仲間。」

どうだ。実に簡潔ではないだろうか？

「「「……………」」」

啞然とした様子の三人組。わかりやすいように簡単な実践まで組み込んだというのに、まだわからなかったのか。実践と言ってもじゃれあいのようなものだったが。

「……はああああっつ！……！！！！？」

たつぷりと間を置いて叫んだ三人の声は耳が痛い程に響いた。全く息の合った三人である。  
何も喋らず空気化中の商人夫婦は今まで石のように固まっていたが、とうとう顎が外れたようだった。

その後三人にお前ただ者じゃないだろ的な事を散々言われたが、私自身は今日村を出たばかりのただ者な訳なのでそんな事言われてもどうしようもない。ギルドに登録さえしていないと言えばまた驚かれた。

「まさか素手でブラックベア倒すとはなあ……」

「世の中広いもんだねえ……」

「非常識ですよ本当……しかもギルド未登録だとは……」

はあ、と溜息をはく三人。ゲルトナが痩せたように見えるのは気のせいだろうか。だが話してみると三人ともなかなか気さくな人物だ。結構仲良くなった。危険性がないと知って、熊にも慣れたようである。



今日は熊とキングオーガの戦闘や三人組とのお喋りのせいで、あつという間に夕暮れ時となつてしまつていた。今からヴィーニットへ行つても夜にしか着かないだろう。仕方ないので野営する事にした。

「クレイン君、野営するならよければ一緒にしないか？」

「一緒に？」

「ああ。ランク上位のモンスターに賊の多発。思つていたよりもこの街道は危険になつてゐるらしいからな。人数が多いが危険に備える事が出来るだろう？それにクレイン君は強いからな。」

「確かに：上級モンスターがウジャウジャといるなら、正直我々だけでは心許ないです：。クレイン殿、どうですか？キングオーガのお礼もヴィーニットでしたいですし。」

考えてみる。あつたばかりだがこの三人は接してみた感じ、悪い人物ではなさそうである。まさかの悪人だった場合は実力行使するだけだが。

この三人との野営もそれ程嫌という訳じゃない。それにこの街道は結構危険度があがつてゐるらしいし、心許ないというのも本当なのだろう。私は彼等の話に乗る事にした。

「分かつた。異論はない。」

「本当ですか？ありがとうございます。ヴィーニットに着いたら是非とも礼をさせて下さい。」

「坊やは強いみたいだからね。心強いよ。」

「俺からも礼を言う。さてと、話はまとまつたし、早速準備でもするか。」

その後、固まっていた商人夫婦をどうにか正気に戻し、野営に適した感じの開けた場所に移動し準備をする。

だがその間私と熊は狩りをしていた。これも食料のため。ぶっちゃけて言うとうと食料品を持ってきていない。荷物の中で料理関係のは鍋と調味料だけだ。あとお玉とか色々。私は基本現地調達である。修業の時も大体そうだった。

狩りではゾツクルという兎に似たモンスターを狩った。牙だけ鋭く兎より少し狂暴そしてデカイというだけなため、結構食用として食べる。なかなかの味と身の多さではある。熊は、近くに小さな川があつたようで、そこで魚を何匹かとっていた。

魚とゾツクルを手土産に戻りゲルトナと一緒に調理。調理といっても焼いて私持参の調味料で味付けした程度の本当に簡単なものである。意外にもこういうのはゲルトナが一番上手らしい。いや、意外でもないか。

「え、存在感ない奴は大体手先が器用？そりや悪うございましたね影が薄くて！……え？褒めてるんですか？厭味にか聞こえないんですけど。」

私としては褒めているつもりだったのだが、ゲルトナは気にしているらしいようだった。ゲルトナは存在感希薄だがその分結構喋るためバランスはとれているのでは、と私は思う。多分。喋らなかったら酷く影が薄いが。

その後腹ごしらえを済まし、やっと商人夫婦の名前を聞いた。カザルフ・コリックさんとその妻エルナさんというらしい。顎は何とか無事のような。コリック夫妻は礼を言っていたが、礼なら熊に言ってくれと言えばまた怯えつつも熊と握手していた。

「結界の首飾り？」

「ああ。」

そういえば、と母にもらった首飾りを思い出した。野営をするならこれは役に立つのではないだろうか。結界にこめられた威力というものはどうなのか、そう思い魔術師であるゲルトナに見せてみた。

「これは…」

瞠目するゲルトナ。

「凄くハイレベルな魔導具ですよこの首飾り！」

「そうなのか…」

流石はレティの母君である。きっと腕のいい魔術師だったと思われる。これがあれば安全は高められるのではないだろうか。

「凄い魔力だ…。クレイン殿はこれをつくった方とお知り合いで？」

「一応。もう十年も会ってないがな。そんなに凄いものなのか。」

「凄いですよ！これなら強力な結界を張れますね！」

「試してみるか。」

「え？」

私はゲルトナが持っている首飾りを取り寄せ、結界、と呟く。すると透明な膜のようなものが首飾りから広がった。膜は私とゲルトナを包むように丸く広がる。これが結界か。

結界の外にいる熊にアイコンタクトを送って、衝撃に備える。隣の

ゲルトナはまだ分かってない様子だ。

「クレ」

「ガオオン！」

ゲルトナが何か言葉を発しようとした瞬間、熊が気合いの入った体当たりをしてきた。

ジリッ

「ガウ！」

結界は少しづれただけでまた元に戻る。熊の体当たりはここまで届かない。しかも体当たりした熊は結界に触れてちよつと痛かったようだ。

結界の威力を確認した私は、結界を解除した。

「クレイン殿っ！何してくれてんですか！」

「いや、結界を試したただけだが？」

「何か一言くださいよ！熊殿がいきなり襲い掛かってきて、死ぬかと思いましたよ！」

そう言ったゲルトナはちよつと涙目だった。心臓に悪かったらしい。

「おーい、何があつたんだ？」

野営場所とは少し離れていたが、熊の声を聞き付けたガルド氏が様子を見にきた。

ゲルトナが涙目になっている理由を話せば、大笑いされた。

「ドリズさんは体験してないから笑えるんですよ…」

「確かにそれは心臓に悪そうだなあ。」

ゲルトナが何かぶつぶつ言っていたが、結界の威力が分かったのでよしとする。大きさも調整できるようで、グレイシアさんの腕は本当に凄いのだと実感した。この首飾りのおかげで安心の夜を過ごせそうだ。

野営場所に帰るとライディンさんとコリック夫妻がいた。ゲルトナはライディンさんにも笑われていたが、コリック夫妻は逆に青ざめている。カザルフ氏の眼鏡がずり落ちていた。それでも結界があることに安心はしたようだ。

他にも色々と話した後、体を休めるためにそれぞれは就寝。念のため見張りは交代でやるが。私は最初の見張りを熊と一緒に買っ  
て出た。

「ふう…」

今日は久しぶりに村の住人以外と触れ合った。盗賊や熊にも会った。初日だということにかなり濃い一日である。

そう思いながら空を見上げる。レティは今何をしているんだろうか。いやもう寝ているかもしれない。王都まではまだまだ距離がある。ゆっくりしてはいられない。

どうかそれまでに、レティが好きな野郎とくっつきませんように。



冒険者三人組、ツツコミは主に影薄（後書き）

ある日私はコンビニへ行った。甘いものが食べなくなったからである。今凄くチョコレートが食べたい。ものっそい食べたいよし食べよう。

ふと、そういえば最近ブラックサンダーを食べていないな。久しぶりに食べようではないか。そう思った私の足は菓子コーナーへ。

あった。結構沢山人荷されているらしい女性に人気なブラックサンダーが、そこには並んでいた。

黒い袋に包まれた小さいそれを二つ私は手に取り、レジにもっていかうとする。

……………ん？

ふいに、違和感。何かがおかしいか？私は手の中のブラックサンダーをまじまじと見る。何もおかしいところなどない。ただのブラックサンダーである。一つ三十二円のなんの変哲もないブラックサンダーである。いや待て私。よく見るその視線の先を。

そこには書かれていた。相も変わらず、ブラックサンダー《黒い稲妻》、と

否、

《黒い雷神》、と

な　　ん　　だ　　と

え、そ、そそそんなまさかアツ…間違えただと？間違えたのか私は！ちょ、今更？小説にも稲妻って書いてあったぞちくせう！こんなところで気付くなんて！こんなやつてないよ！あんまりだよ！働けよ私の海馬！何のための記憶領域だよ海馬！海馬って記憶領域だっけ！？

しかも何？稲妻より雷神の方がカツコイイ気がする…厨二と言われても仕方ない！くそっ、しくった！私の目はふしあなか！眼鏡が何の意味もねえ！今更雷神に直すのもなんかなア！私って、ホント馬鹿あああああ！！！！！！

長々と失礼しました。この後書き長エよ馬鹿、と思う方は読み飛ばして頂いて全く問題ありません。ええ全く。

あの日私はのたうちまわりました。コンビニではなく家で。ちなみにブラックサンダーは私の中で勝手にポピュラーなお菓子だと思っているので、コイツ間違つてやんのププツとお考えの読者様がいる



のでは！という自意識過剰な精神を持っています。お恥ずかしい限りです。

いまだに名前を直そうか迷っています。もういっかなー別に稲妻で、だが雷神も捨て難い…。そこまで悩む事ではないかもしれませんが、ちよつとやるせなくなつたので後書きにはいてしまいました。長くて申し訳ないです。

一部ネタがありますがご容赦下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3617x/>

---

初恋の君はホモ

2011年11月12日10時27分発行